

公開実用 昭和63- 126258

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報(U) 昭63-126258

⑬ Int.Cl.⁴

B 65 D 41/26
1/02

識別記号

庁内整理番号

6727-3E
A-6727-3E

⑭ 公開 昭和63年(1988)8月17日

審査請求 未請求 (全 頁)

⑮ 考案の名称 計量カップ兼用蓋体付き容器

⑯ 実 願 昭62-16778

⑰ 出 願 昭62(1987)2月6日

⑱ 考 案 者 吉 田 仁 昭 奈良県磯城郡三宅町大字伴堂551番地 天龍化学工業株式
会社内

⑲ 出 願 人 天龍化学工業株式会社 奈良県磯城郡三宅町大字伴堂551番地

⑳ 代 理 人 弁理士 石井 曉夫

明 細 書

1. 考案の名称

計量カップ兼用蓋体付き容器

2. 実用新案登録請求の範囲

(1). 上部に円筒状の注ぎ口を一体成形した容器本体と、前記注ぎ口に着脱自在に被嵌する有底円筒状の蓋体とから成る容器において、前記蓋体の内底面に、前記注ぎ口内に嵌挿自在な計量カップを一体的に連設する一方、前記注ぎ口の開口縁適宜部位には、断面略V字状又はU字状の注ぎ出し案内内部を膨出形成したことを特徴とする計量カップ兼用蓋体付き容器。

3. 考案の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本考案は、計量カップ兼用の蓋体付きの容器に関するものである。

〔従来の技術〕

容器の蓋体を計量カップとして利用することは良く知られているが、従来は単に蓋体を容器本体に対して被嵌したに過ぎなかったため、蓋体を計

量カップとして利用したあと容器本体に被嵌すると、蓋体内面に付着した液体が容器外面に垂れ落ちる問題があった。

そこで先行技術としての特開昭59-152160号公報は、第5図に示すように、容器本体11の開口部11aに、内外二重の筒体12a、12bを一体的に連設して成る中栓12を嵌着し、その内筒12aを注出口に形成すると共に、中栓12の外筒12b内面に計量カップ兼用の蓋体13を着脱自在に嵌挿し、且つ、内筒12aと外筒12bとの間の円板状連設部12cにドレン孔14を穿設することにより、蓋体13の内面に付着した液体を容器本体11に還流させるようにしたものを提案している。

〔考案が解決しようとする問題点〕

ところで、このように中栓12の内筒12aを注ぎ口に構成した場合、当該内筒12の断面積は容器開口部11aの開口面積に対して可成り小さくなるため、注ぎ出しに際して容器本体11内外の空気の流通が十分に行われず、容器本体11内

部に負圧が発生して液体が断続的に流出する現象が生じ、このため、蓋体 1 3 への注ぎ出しに際しては、液体が飛び散らないよう極く少量ずつ流出させねばならず、蓋体への注ぎ入れに手間がかかる問題があった。特に、内容物が液体洗剤のように粘度の高いものである場合には、その不具合が顕著に発生するのであった。

また、前記先行技術では容器本体 1 1 とは中栓 1 2 とを別々に形成せねばならないため、製造コストが高む点にも問題があった。

本考案は、蓋体を計量カップとして利用するに際しての上記問題を解消することを目的とするものである。

〔問題点を解決するための手段〕

この問題を解決するため本考案は、上部に円筒状の注ぎ口を一体成形した容器本体と、前記注ぎ口に着脱自在に被嵌する有底円筒状の蓋体とから成る容器において、前記蓋体の内底面に、前記注ぎ口内に嵌挿自在な計量カップを一体的に連設する一方、前記注ぎ口の開口縁適宜部位には、断面

略V字状又はU字状の注ぎ出し案内内部を膨出形成したものである。

〔作用・効果〕

このように構成すると、蓋体を容器本体から取り外して当該蓋体の内部に一体成形した小径の計量カップに注ぎ出しできる一方、計量カップを使用して蓋体を容器本体に被嵌すると、計量カップは注ぎ口の内部に嵌挿されるので、計量カップ内面に付着した液体は容器本体内に直接流下し、閉蓋後において液体が容器本体外面に垂れ落ちることを防止できる。そして、注ぎ口に計量カップを嵌挿するようにしたから、注ぎ口の開口面積が大きくなって容器本体内外の空気の流通が促進され、液体は至極円滑に流出することになる。

しかして、円筒状の注ぎ口から液体を流出させる場合、その直径が大きくなると液体が横広がり膜状になって流下することになるが、計量カップは注ぎ口よりも小径であるため、注ぎ口の開口縁が単なる円形であると、計量カップに対して液体を注ぎ入れにくくなると共に、注ぎ口に対する

液体の付着面積が増大して液体の「切れ」も悪くなる問題が生じる。

これに対して本考案は、注ぎ口の上端縁適宜部位に、平面視略V字状又はU字状の注ぎ出し案内部を膨出形成しているから、この注ぎ出し案内部を下向きにして注ぎ出すことにより、液体を細巾の状態に注ぎ出すことができ、計量カップが小径であってもその内部に正確に注ぎ入れることができ、しかも、液体が細巾の状態に流下するから、注ぎ口の縁部に対する液体の「切れ」も良くなる。

従って本考案によれば、計量カップ内面に付着した液体を閉蓋後において全て容器本体内に流下させることができると共に、液体を細巾状の状態に円滑に流出させることができるから、液だれを生じることなく蓋体を計量カップに兼用できるものでありながら、計量カップへの注ぎ出し作業を迅速且つ正確に行うことができる効果を有する。

しかも、注ぎ口は容器本体に一体成形したものであるから、製造コストを低減できる効果も有する。

〔実施例〕

次に、本考案の実施例を図面（第1～4図）に基づいて説明すると、図において符号1は、上端に円筒状の注ぎ口2を一体成形して成る合成樹脂製の容器本体で、前記注ぎ口2は、下部2aを大径に上部2bを小径に形成し、下部2a外面に雄ねじ3を造形する一方、上部2bの開口縁適宜部に、平面視V字状の注ぎ出し案内部4を膨出形成している。なお、注ぎ出し案内部4は、平面視略U字状に形成しても良いし、また、この注ぎ出し案内部4は複数箇所に形成しても良い。

符号5は、前記注ぎ口2に着脱自在に被嵌する合成樹脂製の有底円筒状蓋体で、その開口縁寄りの内周面に、前記注ぎ口2の雄ねじ3に螺合する雌ねじ6を造形すると共に、その底板5a内面に、前記注ぎ口2に嵌挿自在な計量カップ7を同心状に一体形成している。

また、蓋体5の内周面と計量カップ7の外周面との間の環状隙間には、蓋体5の底板5aと注ぎ口2の上端面とをシールするためのゴム等の弾性

体製リングパッキン 8 を嵌着している。

かかる構成であるから、蓋体 5 を取外せば、その計量カップ 7 を利用して内容物を一定量だけ小出しできる一方、閉蓋すれば計量カップ 7 は注ぎ口 2 内部に嵌挿されるから、計量カップ 7 内面に付着した液体は全て容器本体 1 内に垂れ落ち、外部への液垂れが防止される。

その場合、注ぎ口 2 は計量カップ 7 よりも大径であるから、注ぎ出しに際して容器本体 1 内外の空気の流通が促進され、液体が断続的に流出する現象を生じることなく一定流速で円滑に注ぎ出すことができる。

しかして、注ぎ口 2 の開口縁が単なる円形であると、その径が大きくなるに従って流れ出る液体の巾が広がり、膜状になって流れ落ちるため、小径の計量カップ 7 に対して正確に注ぎ入れにくくなると共に、注ぎ口 2 の開口縁と液体との濡れ面積が増大して液体の「切れ」も悪化する問題が生じる。しかるに本考案では、注ぎ口 2 の開口縁に V 字状等の注ぎ出し案内部 4 を形成しているから、

この注ぎ出し案内内部4箇所から注ぎ出すことによって液体を細巾状で流出させることができ、計量カップ7が小径であっても正確に注ぎ入れることができると共に、液体の「切れ」も良くなるのである。

しかも、注ぎ口2と容器本体1とは、従来公知のブロー成形によって一体成形できるから、上記のような優れた効果を有する容器でありながら安価に提供できるのである。

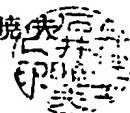
4. 図面の簡単な説明

第1～4図は本考案の実施例を示し、第1図は容器本体の斜視図、第2図は蓋体の斜視図、第3図は容器本体の平面図、第4図は蓋体を被嵌した状態の縦断正面図、第5図は従来技術を示す斜視図である。

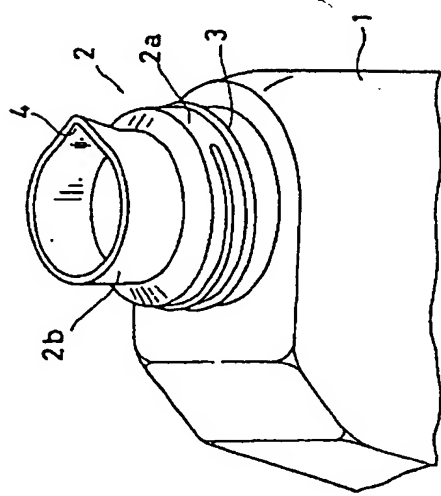
1・・・容器本体、2・・・注ぎ口、4・・・注ぎ出し案内内部、5・・・蓋体、7・・・計量カップ。

実用新案登録出願人 天龍化学工業株式会社

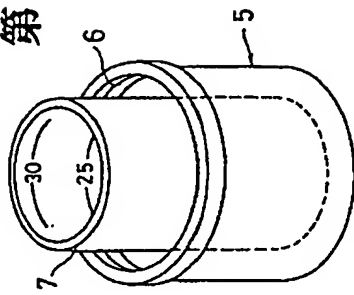
代理人 弁理士 石井 曉夫



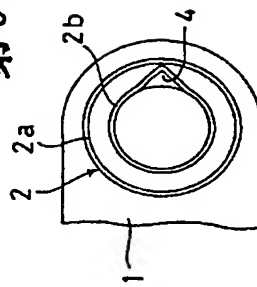
第1図



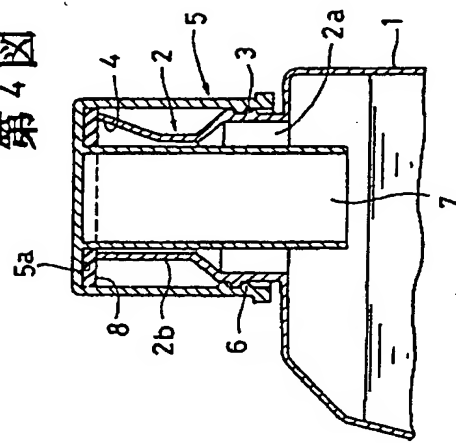
第2図



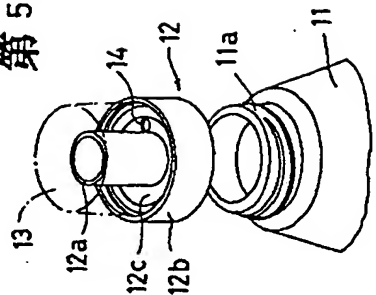
第3図



第4図



第5図



代理人 株式会社井崎栄

115/1